

東京国立近代美術館で5月27日まで開催の展覧会、4月19日に観てきた。この美術館には、菱田春草展、熊谷守一展を観に来たこともある。どれも、学生時代の運動部仲間のF君が、有難いことに入場券を回してくれるお蔭だ。

さて、開場10時の5分前に入れたが、第1室が既に大勢の入場者でごった返しているのにびっくり。まず目に入ってきたのが「屈原」(Fig 1)。小学生の頃の僕が抱いていた大観のイメージは「飯の代わりに酒を飲み、富士山ばかり描いている長生き爺さん」。中高生の頃に、「屈原」とか、「無我」(Fig 2)を本の図版で見て、「大観も、こんな絵を描いていたんだ」と認識を改めた記憶がある。

1898の「屈原」は、師の岡倉天心が褒めたそうだが、批評家から「人格者の屈原を感情的な表情で描いた」と非難されたという。1897の「無我」は、無垢で自然な印象で、僕が昔から好きな絵。ところが、「美術学校で抽象的概念(ここでは仏教)を絵にする実習をさせていたものの一つ」ということを今回初めて知った。



Fig 1



Fig 2

展示は、明治、大正、昭和に分けている。僕にとっては、明治・大正期の絵の方が好ましかった。例えば、富士山。昭和の富士山で気に入ったのは1953の「霊峰飛鶴」(Fig 3)のみ。1940の「山に因む十題」は俗っぽくてつまらない。1927の「朝陽霊峰」(Fig 4)は好きになれなかった。皇室との縁が始まったものだが、このあと富士山の絵を量産するようになったという。昭和10年代には大観は「彩管報国」(絵筆で国に報いる)を唱えて、陸海軍に絵の売上金を寄付したりしている。政治的意図と芸術品は無関係との見方もあろうが、どうも、明治・大正期のよさが昭和で減じたような気がする。これに比べ、1920の「霊峰十趣のうち」は最も写実的な「秋」、より抽象的で「ぼかし」を入れた「夜」、最も抽象

的な「春」(Fig 5)、それに「山」といずれも、デフォルメと単純化により強い印象を与える。1917の「群青富士」(Fig 6)は金屏風の左手に富士を寄せたもので、これも傑作だ。



Fig 3



Fig 4



Fig 5



Fig 6

1936の「龍蛟躍四溟」(Fig 7)も皇室に納めたもので「日本を取り巻く厳しい世界情勢」を表わしているというが、うずまく雲は別として、龍の目が人間的で面白い。大観の描く動物の顔は人間臭い。1913の「山茶花と栗鼠」(Fig 8)のリスのしぐさ、1921の「胡蝶花(しやが)」(Fig 9)のイタチの目はかわいい。



Fig 7



Fig 8



Fig 9

大観は題材の選択も奇抜で、ナイヤガラ瀑布と万里の長城を対の屏風に組んだものがある。この展示会での新出作品が「彗星」と「白衣観音」(Fig 10)。前者は「ハレーすい星」、後者は「インドもの」。白衣観音の表情はいかにもインド的だが、手足が不自然。解説に拠れば、大観はデッサンが不得手だったとのこと。インドものとして有名な、僕も好きな「流燈」は5月8日~27日展示で、今回観られず残念。



Fig 10



Fig 11



Fig 12

大観は、絵具の使いか方も奇抜で、1911の「瀑布(ナイヤガラの滝・万里の長城)」では岩絵の具を平たく塗らずに、点描やたらしこみを試みている。同じく1911の「山路」(Fig 11)では粒子の多い新岩絵の具を油絵風に塗り付けている。

夏目漱石が大観の個性を称賛した「瀟湘(しょうしょう)八景」は、彩色・水墨と一幅ずつ表現を変えている。僕が気に入ったのは彩色で人物の入った「江天暮雪」と「漁村返照」(Fig 12)。僕は中国の庶民を描いたものが好きだ。本展の呼び物である、1923の45メートルの長さの重要文化財である水墨絵巻「生々流転」(Fig 13)の壮大な岩や流れの合間に、人物が少しずつ現れるところを楽しんだ。大観は「琳派」の影響もうけて、1917年の屏風「秋色」(Fig 14)を描いているが、色彩が流麗で、昔の琳派に比べ、(アンリ・ルソーほどではないが)余白が少ない。

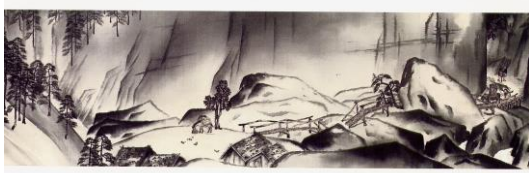


Fig 13



Fig 14

先に、昭和期に良い絵が少ないと書いたが、昭和期のもので、5月8日~27日展示のため、今回観られずに残念だったものがある。豪華絢爛な1929の「夜桜」、1931の「紅葉」、それに大好きな1936の「野の花」である。本物を観ていないので、本報告では絵を省略。

燃える男大観と理論家の春草とは、お互いに好きな大親友。うらやましい。36歳という春草の夭折に際しての大観の悲嘆はどれほどだったか。交流がわかる「名家寄せ書き」、春草をしのんで友人たちが寄せ書きした「花卉(かき)線香」の展示があった。

以上